



TITLE:

[エッセイ]「先生」としての漱石について
の長い註

AUTHOR(S):

矢野, 智司

CITATION:

矢野, 智司. [エッセイ]「先生」としての漱石についての長い註. 臨床教育人間学 2007, 8: 61-68

ISSUE DATE:

2007-05-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197033>

RIGHT:

[エッセイ]

「先生」としての漱石についての長い註

矢 野 智 司

私は以前に「『先生』としての漱石——師弟関係の教育人間学的考察」というタイトルで「先生」としての漱石を考えてみたことがある[矢野 2003]。漱石が生きた時代は「師弟」という教育的関係が大きな力となりえた時代であった。しかし、この論文では紙幅の制約からその歴史的な生の形態を十分に描きだすことができなかった。そこで歴史的な「先生」としての漱石を考えるためにこの論文への補足的な長い註を書いてみようと思う。

★漱石の弟子ということ

明治以降の人間形成の歴史をみたとし、明治期の後半には明治第一世代ともいべき内村鑑三(1861-1930)、新渡戸稲造(1862-1933)、岡倉天心(1862-1913)、夏目漱石(1867-1916)、正岡子規(1867-1902)といった巨星のように輝く人格的に大きな影響力をもつ師が出現し、彼らを中心に彼らに心酔した青年の弟子が集まった師弟のサークルが数多く存在していた。そのようなサークルは、たんに師の感化力だけではなく、師弟の縦糸とともに友情の横糸とが折り合わされることによって大きな人間形成力をもっていたといわれる[高橋 2001:34]。

これらのサークルがそれぞれの師の個性によって異なった性格をもっているのは当然にしても、師弟関係の在りように師の個性の差異を超えた深い類似性があるように思われる。そして、この師弟関係は、それ以降の日本人の人間形成の歴史においてたえず振り返られ、近代日本における師弟関係を考えると時の原像となってきた。もっとも歴史的にみれば、日本では釈迦とその弟子(「十大弟子」)、孔子とその弟子(「孔門十哲」)が師弟関係のモデルとして捉えられた。例えば、そこから芭蕉の弟子が「蕉門十哲」(蕪村)と呼ばれたりするように、後の師弟関係はこの「人類の教師」の師弟関係をなぞらえるようにして捉えられた。芥川龍之介が『枯野抄』において漱石とその弟子を芭蕉とその弟子に置き換えたのには十分に理由のあることだった。ちなみに津田青楓は「蕉門十哲」を意識して『漱石と十弟子』(1949年)というタイトルの著作を出版している。

漱石の周辺には、「漱石山脈」(本多顕彰)と呼ばれるように、五高時代の教え子である寺田寅彦(1878-1935)をはじめ、才能に溢れた多くの年下の弟子たちが集まっていた。彼らは頻繁に漱石のもとを訪れ、漱石にさまざまな悩みや問題を相談し、また漱石と文学や思想について議論した。あまりに訪問者が多かったために、漱石は1906(明治39)年より鈴木三重

吉の案をいれて、弟子たちとの面会日を毎週木曜日と定めた。そのためこの談話会は後に「木曜会」と呼ばれるようになった。木曜会のメンバーには次のような人々がいた。誕生年順に並べると、松根東洋城 (1878-1964)・橋口五葉 (清) (1880-1921)・森田草平 (1881-1949)・鈴木三重吉 (1882-1936)・中川芳太郎 (1882-1939)・安倍能成 (1883-1966)・野上豊一郎 (1883-1950)・阿部次郎 (1883-1959)・小宮豊隆 (1884-1966)・中勘助 (1885-1965)・内田百閒 (1889-1971)・和辻哲郎 (1889-1960)・赤木桁平 (1891-1949)らがいる。また死の前年の1915 (大正4) 年11月には、新たに久米正雄 (1891-1952)・松岡譲 (1891-1969)・芥川龍之介 (1892-1927)らが木曜会に参加している。もっとも寺田寅彦のように別格としてこの会とは別の日に漱石のもとを訪れていた者もいたが、面会日を決めることによって漱石はどの弟子たちとも平等に接することが可能となった。

奥野健男は「漱石火山脈」(1958年)のなかで、漱石の弟子を次の3つのグループに分けている [奥野 1976(1958), vol. 1:42-52]。第1グループは、松山中学校時代の生徒である真鍋嘉一郎 (1878-1941)・松根東洋城ら、五高時代の生徒、寺田寅彦・野間真綱 (1878-1945)・野村伝四 (1880-1948)らの古くからの人々で門下生というより友人と呼ぶべき人々。第2グループは、東大の教え子を中心とする人々、鈴木三重吉・森田草平・小宮豊隆・野上豊一郎・安倍能成・阿部次郎・赤木桁平・中川芳太郎らの最も親しい人々である。そして和辻哲郎・内田百閒・武者小路実篤 (1885-1976)・江口渙 (1887-1975)を経て、第3グループは芥川龍之介・久米正雄・松岡譲等の、晩年の漱石の周囲に集まった人々である (奥野は断っていないが、この分類は同年に発表された中野好夫の「漱石とその門下生」(1958年)に基づいている [中野 1985(1958), vol. 8:70])。

★「先生」漱石との交わり

この漱石と弟子との関係を論じるときの第一次資料は、漱石と弟子の間で交わされた手紙類である。それらは後の回想録や伝記のように弟子の使命感や負債感による神話化を受けていないだけ師弟関係の動態をよく示している。漱石は受け取った手紙類をそれほど注意深く保存してはいなかったが、漱石から弟子たちに送られた手紙類は当然弟子たちによって大切に保管されていた。残された漱石の手紙を読むと、鈴木三重吉や森田草平や小宮豊隆といった弟子たちにたいして、漱石は驚くほど細やかな配慮に溢れた手紙を頻繁に書き送っていたことがわかる。例えば、木曜会がスタートした当初、森田草平と鈴木三重吉との間をつなぐために、漱石はわざわざ三重吉に手紙を書いている。

「君は森田の事文は評して来ない。恐らく君に氣にいらんのだらう。あの男は松根と正反対である。一挙一動人の批判を恐れてゐる。僕は可成あの男を反対にしようしようとなめてゐる。近頃は漸くの事あれ丈にした。それでもまだあんなである。然るにあゝなる迄には深い源因がある。それで始めて逢つた人からは妙だが、僕からはあれが極めて自然であつて、而も大に可愛さうである。僕が森田をあんなにした責任は勿論ない。然

しあれを少しでももつと鷹揚に無邪気にして幸福にしてやりたいとのみ考へてゐる。」

[夏目 1996(1906), vol. 22:603-604]

この手紙に先立つ5日前に、森田草平の告白文（漱石によって処分されたために内容は明らかではない）にたいしてその境遇に同情し励ます手紙（書簡 No. 686）を草平に書き送っているのだが、その手紙とともにこの三重吉への手紙を読むとき、漱石の草平にたいする配慮の細やかさを感じないではおれない。またこの手紙では草平にたいする漱石の考えを三重吉に示し、三重吉と草平の関係をつなぐとしただけでなく、さらには漱石の三重吉への信頼の深さを三重吉自身に伝達している。このように漱石書簡集は師弟関係のドラマに満ちている。師弟関係を贈与関係で読み解くことを目的とする拙論「先生」としての漱石では、漱石と弟子それぞれにたいする個別の関係を取りあげてはいないが、これらの手紙類の読解が重要であることはいうまでもない。

それにしてもなぜこのような師弟関係が成立したのだろうか。それは漱石の個性にのみよるのではない。その秘密は「青年」の誕生と関わっている。近代において、子ども期が生まれると同時に子ども期と大人との境界線に位置づく青年期が登場したというのは常識に属するものとなりつつあるが、日本の歴史のなかで「青年」がいつ登場したのかには諸説ある。しかし、明治20年代において青年という人生の一時期が顕在化されたということは間違いない。「青年」という言葉は、1880（明治13）年に小崎弘道がYMCAの“Young Men”の訳語として「青年」を当てたことから始まったといわれ、徳富蘇峰の『新日本之青年』や雑誌『国民之友』によってこの言葉が広められ、北村透谷、国木田独歩らによってその内実が形づけられたという[木村 1998, 三浦 2001]。

「青年」とは理想をもつが十分な経験をもたないために、人生上の諸問題に直面して苦悩し挫折を経験せざるをえない。このような青年の苦悩と陶醉の生活は、師弟関係と恋愛関係と友情関係という三重の関係に関わっている。明治40年代はこのような青年が主題化されさまざまな小説が出版された。漱石は青年を主人公にした小説『三四郎』（1908年＝明治41年に発表）を執筆するにあたり、いくつかの題名を考えたが、その候補のなかに『青年』という題名もはいていたといわれる[江藤 1996, vol. 4:163]。また森鷗外は漱石の『三四郎』を意識しつつ『青年』（1910年）という題名の小説を描いている。その他にも同時期に島崎藤村の『春』（1908年）、正宗白鳥の『何処へ』（1908年）、田山花袋の『田舎教師』（1909年）などが出版されている[北村 1998:149]。「青年」は注目されるべき社会的現象であったのだ。漱石が向かい合ったのは、近代学校制度の確立後に登場したこのような「青年」たちであった。例えば、漱石の弟子のなかで森田草平は明治40年代の青年の代表者である。平塚雷鳥との情死行が未遂に終わり、そのことがスキャンダルとなったとき、漱石は森田を自宅に引き取り、事件の顛末を描いた小説『煤烟』執筆の機会を森田に与えた。その『煤烟』（1909年）の東京朝日の予告記事には、「現今の青年中最も此時代風潮に触れし一人なり此多情多恨の青年が得意の麗筆を揮って自己半生の境涯を一片の偽りなく告白したるものなり」

[江藤 1996, vol. 4:201 より重引] とある。

★「先生」漱石の青春

しかし、漱石自身が明治 10 年代末から 20 年代に「青年」を経験していたことは重要である。日本の近代教育制度は 1872 (明治 5) 年の学制の制定にはじまる。1867 (慶応 3) 年生まれの漱石は、戸田学校下等小学、市ヶ谷学校下等小学、東京府立第一中学校正則科というように、明治以降に誕生した近代学校システムで学んだ最初の世代である。もっとも、近代学校システムは完全には整備されておらず、漱石は大学予備門に入学する前に、漢学塾二松学舎に行ったり、大学予備門の受験のために英学塾成立学舎に入学したりもしている。しかし、近代学校システムで学んだということは、漱石の世代をそれまでの世代と異なった世代として特徴づけることになる。この差異のなかでとりわけ重要なことは、大学予備門 (のちに第一高等中学となりさらに旧制の一高となった)・帝国大学において、それ以前の世代では考えることのできないことだが、漱石が藩や身分の違いを超えて同年代の「青年」たちと友情を育んだことである。

例えば、最初、実利的理由から建築家になろうとしていた若き漱石の意志を翻意させ、英文学の道へ進むことを決意させた畏友米山保三郎、経済的に恵まれずとも楽しい共同の下宿生活をした親友中村是公、堅い信頼に基づいて容赦のない相互批判で研鑽しあった文学の友人正岡子規といったように、漱石と彼らとは近代学校において初めて可能となった青年期特有の友情によって結ばれていた。

「余の如きは、入学の当時こそ芳賀矢一の隣に坐つてゐたが、試験のあるたんびに下落して、仕舞には土俵際からあまり遠くない所でやつと踏み応へてゐた。それでも、みんな得意であつた。級の上にあるものを見て、なんだ点取がと云つて威張つてゐた位である。さうして、稍ともすると、我々はポテンシャル、エネルギーを養ふんだと云つて、無暗に牛肉を喰つて端艇を漕いだ。試験が済むと其晩から机を重ねて縁側の隅へ積み上げて、誰も勉強の出来ない様な工夫をして、比較的広くなつた座敷へ集つて腕押しをやつた。」[夏目 1994(1909), vol. 12:259]

このように『満韓ところどころ』(1909 年)に登場する旧友中村是公やかつての学友との交遊の叙述からも、彼らの青年期の生活がどのようなものであったかを推察することができる。その意味でいえば、漱石自身が日本で最初の近代的な意味での「青年」であったといえる。

漱石の経歴をみると、唐木順三がいうほどにはこの「素読世代」が特定の師との人格的な関わりをもっていたわけではないように思われる。むしろ、「時代の大きな変わり目に生い立ち、世の先頭を切って進んだ気概の年齢層という共通性がそなっていた彼ら (鷗外、天心をはじめとし明治初年の頃までに出生した文人・思想家) は、概していうと師をもつ代

わりに友をもった世代であった。また青年期がすぎて壮年となってからは、自らが師となつて、後からやってくる若者たちを弟子としてもった世代ともいえた。』〔高橋 2001:45-46 括弧内は矢野〕という高橋英夫の説明の方が正確に思える。

ただ、明治 10 年代末から 20 年代に青年期を過ごした漱石らの世代が、漱石の弟子となる明治 40 年代の青年たちと決定的に異なる経験をしていたことも事実である。彼らは、原典としての「四書五経」の音読を通して漢文の素養を身につけた最後の世代と言い表すことができる。唐木は音読を通して学ぶ在り方のなかに、身体を通した先生と弟子との型のやりとりをみているが、それよりは、前田愛が述べるように、漢籍の素読の反復が文章の響きとリズムの型を身体化したことが重要であるように思える。

「漢籍の素読はことばのひびきとリズムとを反復復誦する操作を通じて、日常のことばとは次元をことにする精神のことば——漢語の形式を幼い魂に刻印する学習課程である。意味の理解は達せられなくとも文章のひびきとリズムの型は、ほとんど生理と化して体得される。やや長じてからの講読や輪読によって供給される知識が形式を充足するのである。』〔前田 1993:181〕

漱石が晩年に盛んに作った漢詩はもとより、漱石の日記などにしばしばみられる漢籍からの引用などからも、漱石の身体に漢籍の素読による響きとリズムがいかに深く刻印されたかを伺い知ることができる。このような「型」から来る思考の作られ方が同時に、社会や世界への構えを形成していたのである。しかし、近代学校で要請される黙読は、このような声とつながる身体的な関わりを必要としない。近代学校システムはこのような身体の型を全く別のものに変えてしまった。このような「型」が教養世代にはないという唐木の指摘はその意味で妥当なものといえる。

漱石世代の青年期にとってもう一点重要なことは、柄谷行人が指摘しているように、明治 10 年代初頭にありえた「明治維新」の多様な可能性が 10 年代末には閉ざされたことである。西南戦争（1877＝明治 10 年）の敗北、自由民権運動の崩壊によって青年は一種のアノミー状態におかれた。柄谷は『こころ』を論じたなかで次のように述べている。

「明治 10 年代末に北村透谷はキリスト教に向かい、西田幾多郎は禅に向かった。それらは K と同じく極端なものでした。……中略……彼らはそれぞれ政治的な闘いに敗れ、それに対して、内面あるいは精神の優位をかかげて世俗的なものを拒否することで対抗しようとしたのです。しかし、透谷は自殺し、西田は帝国大学の選科という屈辱的な場所に戻っていきました。』〔柄谷 2001:495-496〕

もちろんこれは漱石の青年時代のことをいっているのだ。

青年という時期の経験と政治的挫折、その意味でいえば、漱石とその弟子との師弟関係は、

伝統的な意味での師弟関係とは異なっている。例えば、江戸時代における儒教的な師弟関係と比較してみればよい。礼儀作法などの「型」によって隔てられた距離によって、師は相互模倣のライバル関係に陥ることはない。ここには近代の発明品というべき「青年」はいない。しかし、漱石の弟子には、生まれたときから明治政府があり、英雄熱があり、優れた師を求め、師に心酔し崇拜するようなところが存在した。彼らは師にたいして積極的に「告白」し、そうすることによって「内面」なるものを形成していったのである。中村光夫は「漱石の青春」(1945年)において、注目すべきことを述べている。

「すなわち彼(漱石)が当時の青年あるいは広く近代日本の知識階級の知的な病弊を正確に描いて誤らなかったのは、彼自身が医者である前にまづ病人であつたからである。この意味で先に述べた彼の性格の弱点は、やがて独創に通ずる真実の新しさであつた。／そして彼と二十年後に輩出した「新しい」病人たちとの違ひは、まづ何より彼が自分の病気に本当に苦しみ、その治療を痛切に希ふ病人だつたといふことである。これはいはば明治二十年と四十年との世代の性格の差であるが、漱石が建築家でなしに文学者になつた所以もまたここに存するのである。」

[中村 1972b(1945), vol. 3:156 括弧内は矢野]

この青年を襲った事態を、北村三子は『青年と近代』(1998年)において、近代の表象機械としての訓練がもたらした他者との共振性や一体化の衰弱の病として捉えた。北村の関心は拙論「先生」としての漱石」の主題と近いものといえるが、漱石の評価が大きく異なっている。漱石がそのような病にとりつかれているという指摘はその通りであるが、北村がいうようにそのような病の姿をたんに描いたのではなく、その病が近代の文明化に由来していることに漱石はより自覚的であり、その病の克服を創作活動と人生を賭けて目指していた。この事態における漱石の評価は、彼の文明論をどのように読むのか、修善寺の大患以後の転回をどのように捉えるのか、またその結果としての「則天去私」の境地をどのように評価するのか、といったことと結びついている。

★師の時代から友の時代へ

夏目漱石や内村鑑三といった明治第一世代における偉大な師の時代は終焉し、やがて青年たちのサークルは友情を基調とするものになっていく[内村鑑三のサークルについてはサークルの一員であった正宗 1994、志賀 1999 (1941) を参照]。例えば、「白樺」や「新思潮」は、その内部に漱石への熱烈な崇拜者がいたとはいえ、唯一人の師との親密な師弟関係によって作られたサークルではなく、むしろ友情を基盤としている[高橋 2001:197]。教養主義が古今東西の古典を黙読すること、自分より優れた人をすべて師と仰ぎ多くの師をもつことであるなら、教養主義は唯一の師との人格的交わりを否定する自己形成の原理であるといえる。さらにそれに続く左翼運動の高まりは、このような教養を通して人格を完成しようという自

已形成原理とは異なる生の形態を生みだしていくのである〔竹内 2003:55〕。

✧【引用参考文献】（丸括弧内の年号は初出の年号）

- 芥川龍之介 1996 (1918)「枯野抄」『芥川龍之介全集』第3巻 岩波書店
- 阿部次郎 1961 (1917)「夏目先生の談話 (Dichtung und Wahrheit)」『思潮雑誌』所収『阿部次郎全集』第7巻 角川書店
- 荒 正人 1984『荒正人著作集 小説家夏目漱石の全容』第5巻 三一書房
- 内田百閒 1993 (1969)『私の「漱石」と「龍之介」』筑摩書房
- 江口 渙 1971 (1953)「夏目漱石とその弟子たち」『現代日本文学体系』第29巻 筑摩書房
- 江藤 淳 1970a, 1970b, 1993, 1996, 1999『漱石とその時代』全5部 新潮社
- 1979 (1974)『決定版 夏目漱石』新潮社
- 奥野健男 1976 (1958)「漱石火山脈」『奥野健男文学論集』第1巻 泰流社
- 唐木順三 1967 (1949)「現代史への試み — 型と個性と実存」『唐木順三全集』第3巻 筑摩書房
- 柄谷行人 1980『日本近代文学の起源』講談社
- 2001『漱石論集成 増補』平凡社
- 北村三子 1990「近代青年の登場と師弟関係の変質」『駒澤大学文学部紀要』第48号 121-139頁
- 1998『青年と近代 — 青年と青年をめぐる言説の系譜学』世織書房
- 木村直恵 1998『〈青年〉の誕生』新曜社
- 小宮豊隆 1986, 1987a, 1987b (1938)『夏目漱石』上中下 岩波書店
- 小森陽一・石原千秋編 2000『漱石研究 特集 漱石山脈』第13号 翰林書房
- 志賀直哉 1999 (1941)「内村鑑三先生の思ひ出」『志賀直哉全集』第7巻 岩波書店
- 鈴木三重吉 1938「断片語＝夏目漱石先生追憶」『鈴木三重吉全集』第5巻 岩波書店
- 高橋英夫 1993 (1984)『偉大なる暗闇 — 師 岩本禎と弟子たち』講談社
- 2001『友情の文学誌』岩波書店
- 竹内 洋 2003『教養主義の没落 — 変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社
- 竹田篤司 2002『明治人の教養』文藝春秋
- 筒井清忠 1995『日本型「教養」の運命 — 歴史社会学的考察』岩波書店
- 寺田寅彦 1996 (1932)「夏目漱石先生の追憶」『寺田寅彦全集』第1巻 岩波書店
- 中 勘助 1989「漱石先生と私」『中勘助全集』第4巻 岩波書店
- 中野好夫 1985 (1958)「漱石とその門下生」『中野好夫集』第8巻 筑摩書房
- 中村光夫 1972a (1944)「文明開化と漱石」『中村光夫全集』第3巻 筑摩書房
- 1972b (1945)「漱石の青春」『中村光夫全集』第3巻 筑摩書房
- 夏目漱石 1994-1997『漱石全集』岩波書店
- 本多顕彰 1982 (1947)「漱石山脈 — 現代日本文学地図」『日本文学研究資料叢書 夏目漱石Ⅰ』有精堂
- 前田 愛 1993 (1973)『近代読者の成立』岩波書店
- 正宗白鳥 1994『内村鑑三・我が生涯と文学』講談社
- 三浦雅士 2001『青春の終焉』講談社
- 森田草平 1947, 1948『漱石先生と私』上下 東西出版社 (『統夏目漱石』の増補改訂版)
- 1980 (1942)『夏目漱石』『夏目漱石 (一)』所収 講談社

- 矢野智司 2003 「『先生』としての漱石 —— 師弟関係の教育人間学的考察」 山崎高哉編『応答する教育哲学』ナカニシヤ出版
- 和辻哲郎 1963 (1918) 「夏目先生の追憶」『和辻哲郎全集』第17巻 岩波書店

(やのさとじ 京都大学大学院教育学研究科)